日本フランス語学会第349回例会

**自由間接話法における「皮肉」の言語学的考察**

阿部宏（元東北大学）

　自由間接話法には作者の「皮肉」が感じられる、という指摘がフランス文学や英文学の研究においておいてなされてきた。しかし、この問題については言語学的な立場からの分析も可能なように思われる。

　この話法については、「内容面（心理や台詞）は作中人物が、人称や時制は書き手が担う」という二声説が主流であるが、両者のいずれからも独立した特殊な発話と考えることもできよう。その発話行為においては、作中人物の心理や台詞を作為的にデフォルメして提示することができる。これは間接話法でも可能であるが、その操作が書き手によってではなく作中世界内で行われるという点で大きな違いがある。

　意味論・語用論研究において、20世紀末から主観性への関心が高まってきているが、これは語彙や文法とはレベルを異にし、むしろそれらの根底ではたらく機能である。発表者は主観性は「真実性」、「望ましさ」、「実現要請」の三種あり、それに限られるという立場であるが、自由間接話法の発話においては、「望ましさ」主観性が関与してくるケースがありうる。その場合、任意の事態について「望ましくない」と判断した匿名の語り手は、代弁者の役割を悪用して作中人物の心理や台詞の改変が可能であり、これが「皮肉」の源泉ではなかろうか。